

がれき広域処理

「受け入れ反対」が大勢

伊賀南部環境衛生組合 初の住民説明会

震災がれきの広域処理問題で、伊賀市と名張市でつくる伊賀南部環境衛生組合（管理者・亀井利克名張市長）は十六日、伊賀市阿保の青山ホールで、ごみ処理施設周辺五地区を対象にした初めての住民説明会を開いた。五地区や両市内から約三百二十人が出席し、「不安の種は持ち込まないで」と受け入れに反対する声が続出した。

環境省や県の担当者は、策定したガイドラインの安

伊賀市奥鹿野地区の男性は

だが、そういう方向で活動していくべきと考えている」と述べた。説明会後の取材に、亀井市長は「ガイドラインの安全性は高いが、まだ理解はしてもらっていない。貴重な意見を承ったので、今後の活動に生かしたい」とし、市全体の説明会を開くなどして引き続き理解を求める考えを示した。

説明会では、発言の際に住所と氏名を名乗ることが求められたが、一部の参加者はこれを拒否。ほかの参加者から「地区外の人だ」「司会はしっかり進行をやれ」とやじが飛び、会場が騒然となる場面もあった。

（廣瀬秀平）



参加者からの質問に答える亀井市長（左端）＝伊賀市阿保で

亀井市長は「最終処分場が決まっていない中では、（受け入れについて）具体的な話はできない」とした上で、協定の扱いについても「まだそこまでの話はまだできない」と言及を避けた。また、「『原発をやめる』と国と約束できるなら、喜んで処理させてもらう」と条件を付ける意見に対しては、「私には荷が重い要望